



雲興寺 鐘楼



瀬戸永泉教会 礼拝堂



旧山繁商店



愛知登文会 国登録有形文化財 建物特別公開 2017

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会

「3つの登録文化財を巡る見学バスツアー」

日時：平成29年11月23日(木・祝)

見学コース：①午前 9時30分 ②午後1時30分 パルティせと南口集合

(予定時間)	9時45分	1時45分	雲興寺到着 ①鐘楼
	10時45分	2時45分	瀬戸永泉教会到着 ②礼拝堂
	11時15分	3時15分	旧山繁商店到着 ③旧山繁商店
	11時45分	3時45分	説明終了
	12時00分	4時00分	尾張瀬戸駅到着

主催：瀬戸市交流活力部

助成：平成29年度文化庁文化芸術振興費補助金

・愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会

協力：NPO法人あいちヘリテージ協議会

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきものの生産
の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

本地大塚古墳(西本地町2丁目)	古墳	5世紀	須恵器・ 灰釉陶器
		6世紀	
		7世紀	
宮地古墳(上之山町2丁目)	飛鳥	8世紀	山 茶 碗
		9世紀	
広久手第30号窯跡 木造十一面観音菩薩立像(下半田川町)県 木造阿弥陀如来立像(下半田川町)県	奈良	10世紀	古瀬戸
		11世紀	
		12世紀	
古瀬戸瓶子(寺本町)	鎌倉	13世紀	大窯 製品
		14世紀	
		15世紀	
陶製狛犬(深川町)国 瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町)国 永享年銘梵鐘 聖徳太子絵伝(塩草町)	南北朝 室町	16世紀	連房 製品
		17世紀	
		18世紀	
定光寺本堂(定光寺町)国 織田信長制札(窯町) 菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉] 瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(鳳山町)国 源敬公廟(定光寺町)国 笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町) 石造地藏菩薩立像(片草町)	戦国 安土・桃山	19世紀	明治 (大正) 昭和
		20世紀	
		21世紀	
陶質十六羅漢塑像(寺本町) 六角陶碑(藤四郎町) 旧山繁商店(仲切町・深川町)国登 瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町)国登 陶製梵鐘(深川町)	江戸 近代		

至徳元(1384) 天鷹祖祐が尾州白坂の毘沙門山に草庵を結ぶ
 応永7(1400) 真言宗勝光寺を曹洞宗に帰入し雲興寺とする
 (天鷹祖祐弟子天先祖命)

天和3(1683) ①雲興寺鐘楼建造(当初)

安永9(1780) 雲興寺本堂再建(現存)
 文化7(1810) ①雲興寺鐘楼再建(現存)

明治22(1889) ③旧山繁商店 離れ 建造
 明治33(1900) ②瀬戸永泉教会 礼拝堂 建造
 大正3(1912) ③旧山繁商店 旧事務所・新小屋 建造
 昭和22(1947) ③旧山繁商店 事務所 建造

1 雲興寺（白坂町）

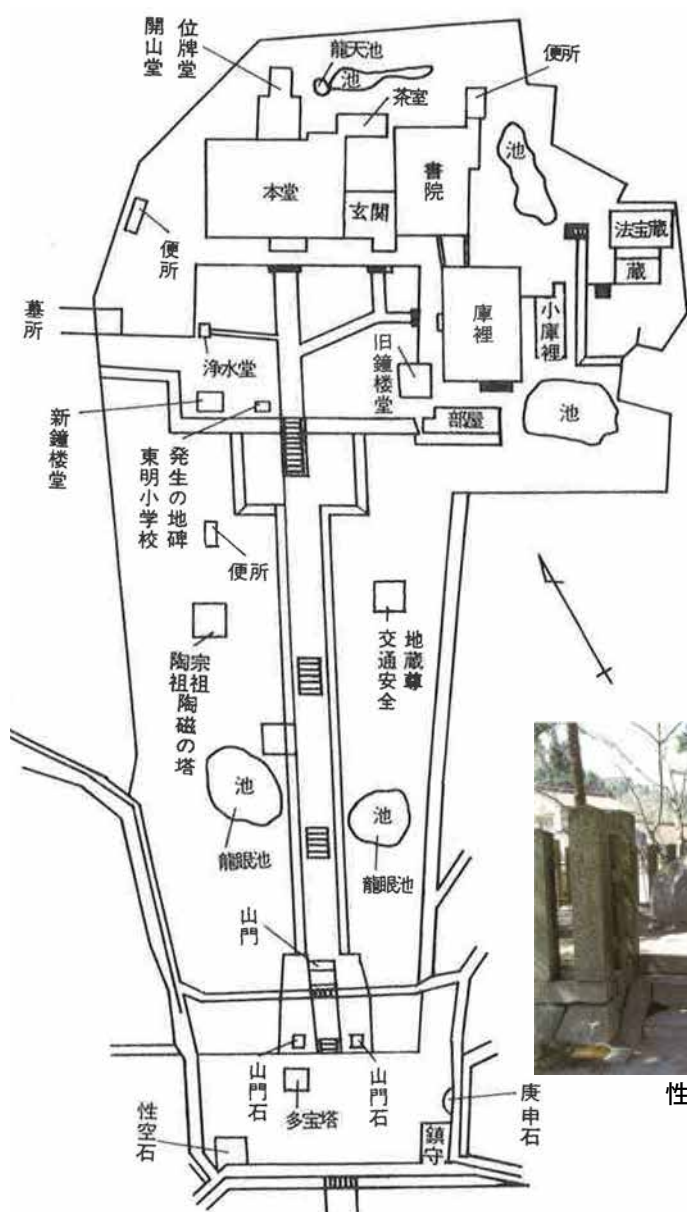
大龍山雲興寺は、尾張の曹洞宗寺院を代表する寺院です。寺伝では、開祖は天鷹祖祐^{てんようそゆう}であり、至徳元（1384）年に尾州白坂の毘沙門山に草庵を結んだことにはじまるとされています。天鷹祖祐の弟子である天先祖命^{てんせんそめい}は、応永6（1399）年に師の命を受け当地の真言宗寺院勝光寺の七堂を整備し翌年に曹洞宗寺院として雲興寺に改号したとされています。

実質的に雲興寺を整えていった天先和尚には数々の伝説があります。応永12（1405）年の春、和尚が大きな石の上で座禅をしていた真夜中に

突然「異形の者」が一刀をもって和尚の前に立ちはだかり、「自分はこの山に住まう鬼神であり、かつての悪行の報いで人の肉を食わねば生きていけず、多くの村人や僧侶を殺してきた。鬼神となる前の報いから救ってほしい」と言いました。和尚は懺悔をするよう穏やかに告げ、「お前の本性は空（何もないこと）である。罪などはどこにもない。」と叱りとばしました。その後、鬼神を「性空上座」と名付け、業報から解脱した鬼神は性空山神として寺を病気・火事・盗難から守ると約束して、大きな石の中に消えたと伝えられます。その消えた石が「性空石」といわれ、事件の起きた4月25日とその前日を大祭（オショウクウサン）として祭りが行われるようになったといわれます。

また、参道の左右にある竜眼池にも伝説があります。村人や僧侶を襲った湿疹に悩まされていた応永25（1418）年の夏に、天先和尚の夢枕に出た龍（毒蛇）の眼を開けてほしいとの願いから、二つの円形の池を作ったところ龍は退散し病気はなくなったとされ、その龍のいなくなった7月7日に門前の村人が竜眼池の掃除をするならわしであるという事です。

本堂の右手前、玄関手前がある薄紅がかった花をつける梅は、そんな天先和尚のお手植えの梅であるとされ「天先梅」として大切にされています（瀬戸の名木No.58）。



性 空 石



天 先 梅

雲興寺境内見取図

（大野栄人・横山住継『尾張 雲興寺史』より）



雲興寺 本堂



雲興寺 玄関・書院・庫裏

○本堂・書院・庫裏

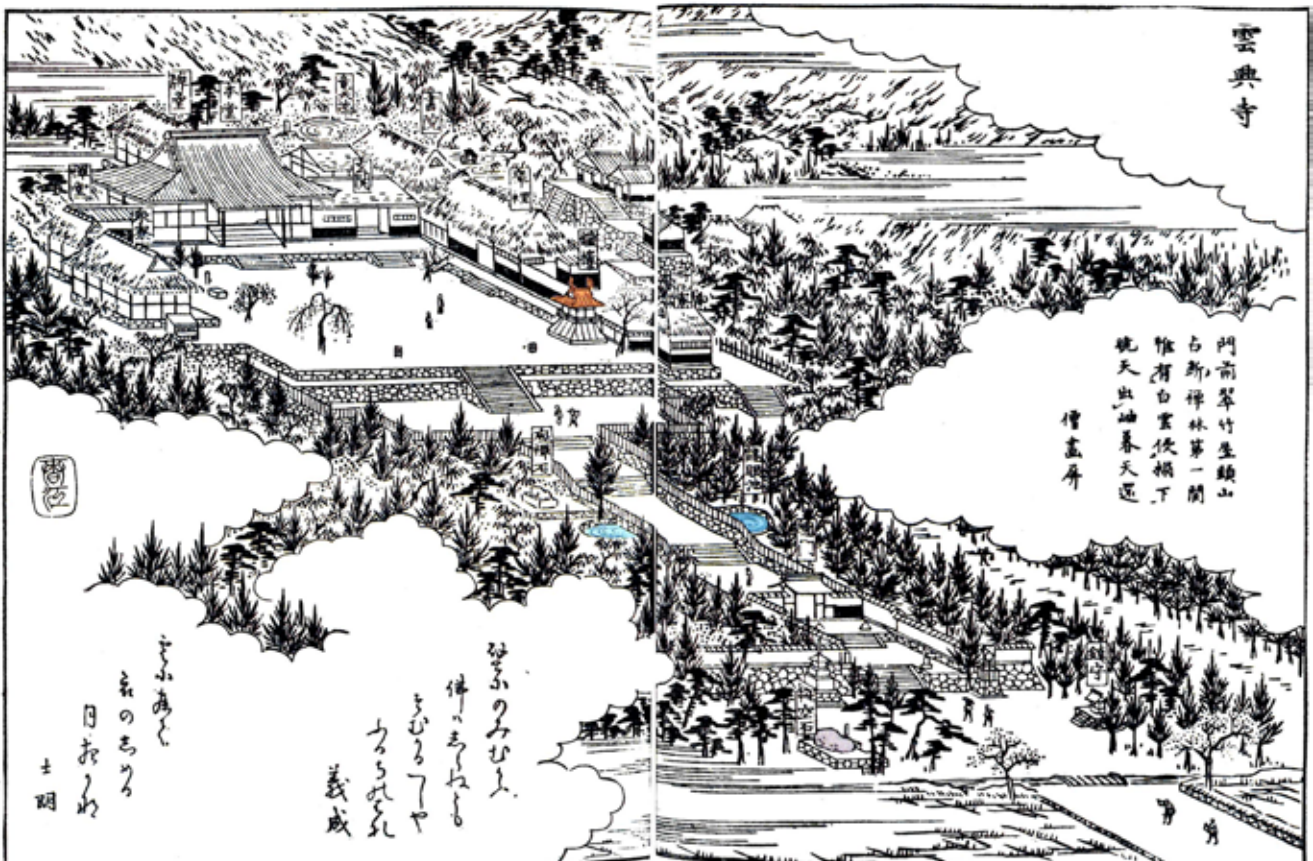
雲興寺本堂は、天文年中(1532-55)に焼失し、織田信秀(信長の父)の援助を受けて再興したとされます。その後織田、徳川の庇護を得て本堂はじめ堂宇が維持されてきました。明和4(1767)年の大洪水で本堂・庫裏その他一切の堂宇が破壊されましたが、安永9(1780)年に30世雪鳳金剛が再建しています。

本堂は、桁行実長11間、梁間実長7間半の大きさで、入母屋造棧瓦葺(瓦は赤津瓦)です。

正面に1間の向拝^{ごはい}がついています。

庫裏は、本堂同様安永9年に再建されましたが、『尾張名所図会』にみられるように幕末には、書院、左翼の禅堂・聚寮^{しゅうりょう}と同様の茅葺の堂であったようで、近代に2階建の入母屋造瓦葺となり戦後に鐘楼近くまで延びる改築がなされました。

書院は、40世実法正三により昭和5(1930)年に新築され、昭和16年に改修がなされています。



『尾張名所図会 後篇 卷四』「大龍山雲興寺」小田切春江画 明治13(1880)年刊行
(株)愛知県郷土資料刊行会 1970『復刻版 尾張名所図会(下巻)』より

○鐘楼

鐘楼は、棟札によれば、天和 3(1683) 年建立の鐘楼が腐朽したため、文化 7 (1810) 年に 32 世戒琳活乗により再建されたもので、この時の大工棟梁は赤津村在住の藤井甚右衛門政清でした。

建築面積は 27.66㎡で、天井棟高は 9.84 m です。桁行 2 間、梁間 2 間で下階に袴腰を付け

た入母屋造の棧瓦葺建物です。下階柱の上に二手先斗^{ときょう}拱を置き、上階の組高欄^{こうらん}付の縁を支えています。上階の欄間には二重菱や連子の窓がみられ、上階柱上には拳鼻付斗^{こぶしはな}拱^{ときょう}が置かれています。瓦には地元の「赤津瓦」を用いています。江戸時代後期の正統派大工による優作といえます。

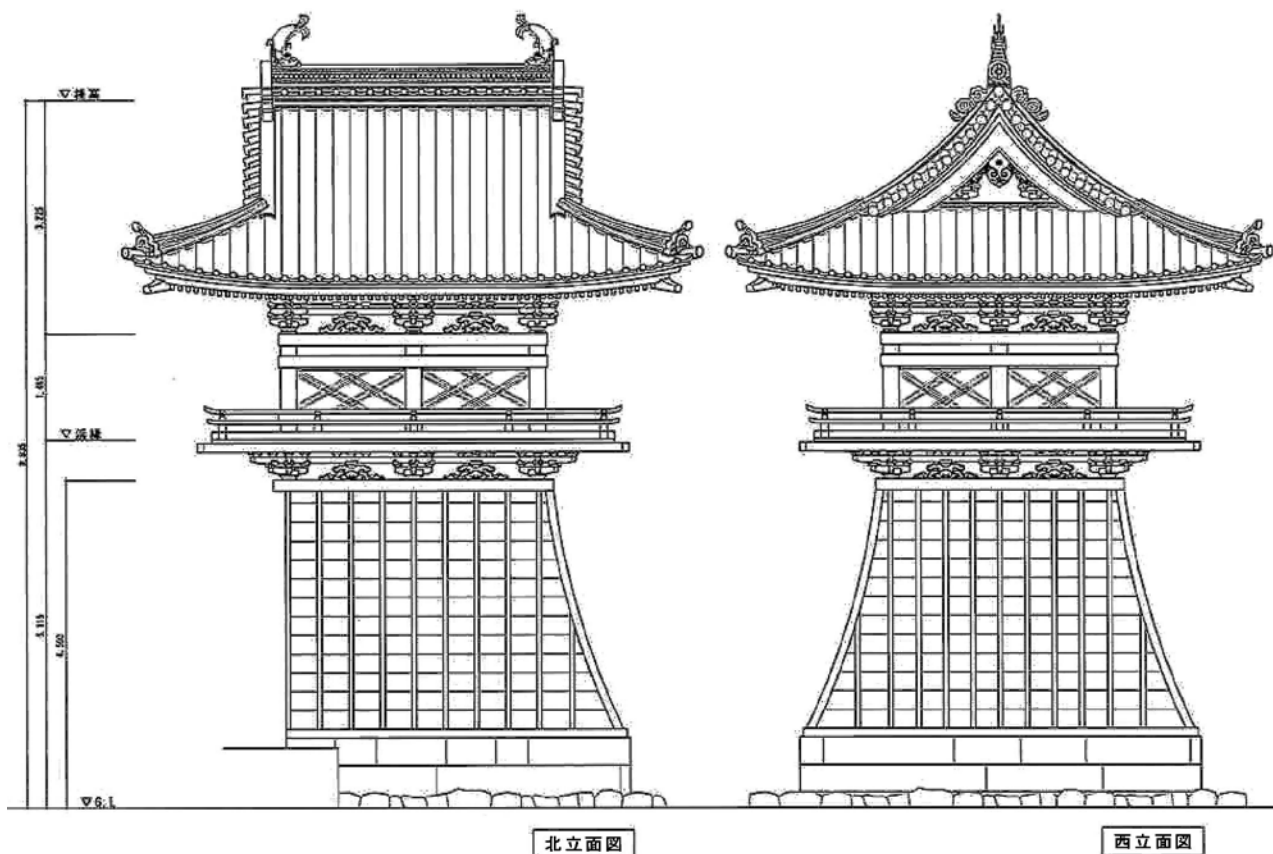
梵鐘は、第二次大戦時に供出され、長らく不在となっていました。平成 21(2009) 年に鐘楼全体の保存修理工事が行われた際に、新たに鑄造されたものです。



雲興寺 鐘楼



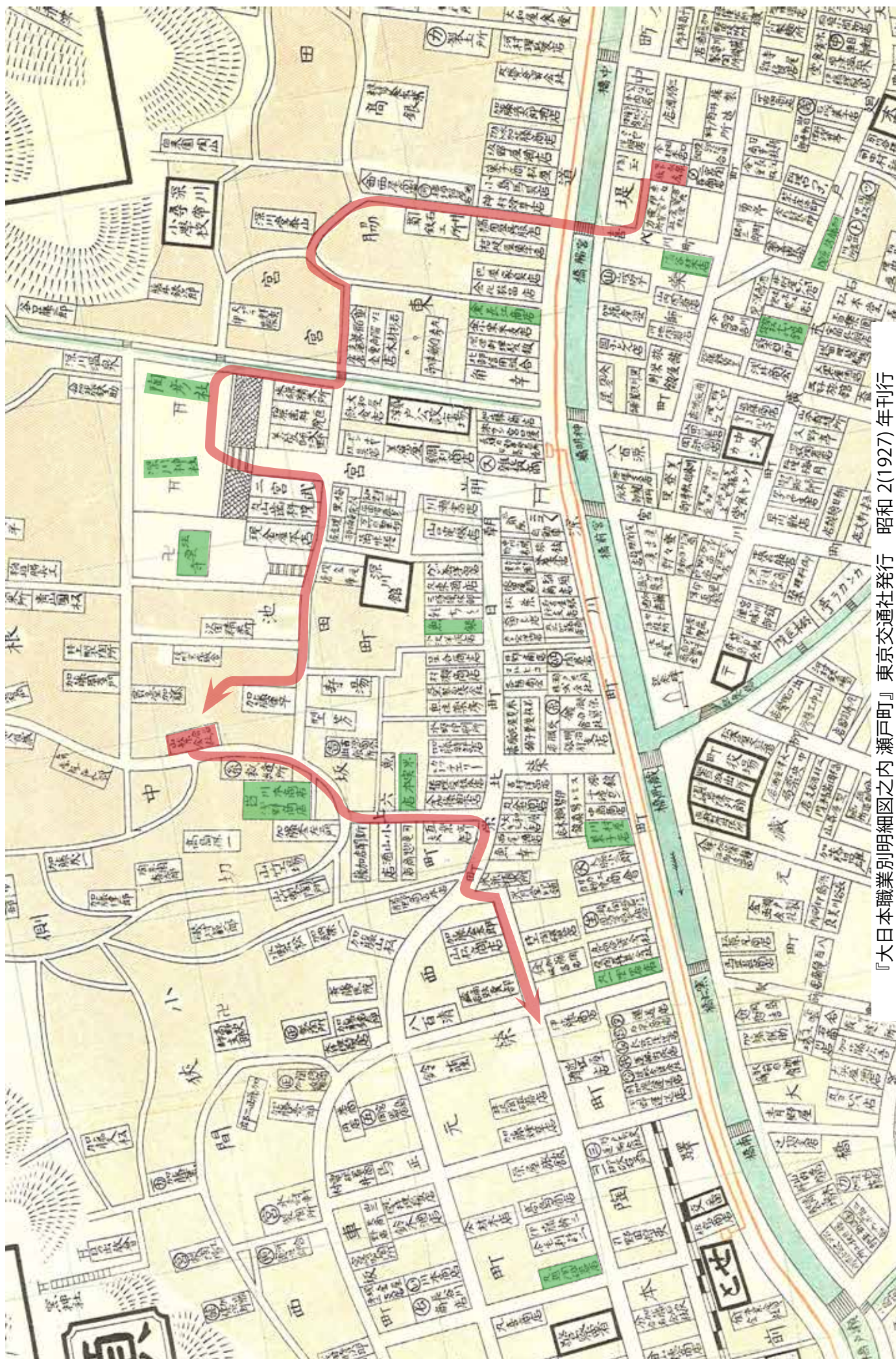
雲興寺鐘楼の赤津瓦



北立面図

西立面図

雲興寺 鐘楼 立面図



『大日本職業別明細図之内 瀬戸町』 東京交通社発行 昭和2(1927)年刊行
 (『瀬戸市史 資料編6 近現代2』(付録)より)

2 瀬戸永泉教会 礼拝堂（杉塚町）

この礼拝堂は、瀬戸永泉教会（プロテスタント長老派）において礼拝をおこなう中心的な建造物です。

瀬戸におけるキリスト教の伝道は、明治12(1879)年に中水野村で行われた講義が始まりとされる。同21(1888)年に永泉教会が設立され、翌年には瀬戸村講義所が建設されました。同29(1896)年に教会は瀬戸に移転し、教会名も瀬戸永泉教会に改められました。同33(1900)年にはジェームスHバラ宣教師をはじめ多くの信者や協力者の尽力により新たにこの礼拝堂が建設され、昭和5(1930)年には正面の六角形のステンドグラスや、正面や側面にみられる上部半円形の飾窓を取り付ける等の改修工事を行ったと考えられます。木造平屋建で、桁行6間梁間4間の、小規模な瓦葺建物です。

屋内天井部分には、洋風建築にみられるトラ

ス構造（キングポストトラス）と、土蔵等に多くみられる和小屋状の貫の構造が組み合った、和洋折衷の特徴がみられます。小屋組トラスの箱金物を止めるボルトが四角であることは、明治期後半代の建造であることを裏付けています。

移築せず現存する明治期の教会建築は、愛知県内では他にメソジスト西尾教会（西尾市、明治30(1897)年竣工）やカトリック主税町教会礼拝堂（名古屋市東区、明治37(1904)年建設）等が知られているのみです。創建から今日まで基本構造が変わらず教会堂として現役である瀬戸永泉教会礼拝堂は、大変貴重な文化財です。

【参考引用文献】

溝口正人 2007「47 瀬戸永泉教会教会堂」『愛知県の近代和風建築』愛知県教育委員会

瀬戸永泉教会 125 年史編纂委員会 2013『瀬戸永泉教会 125 年史』



礼拝堂全景（北西より）



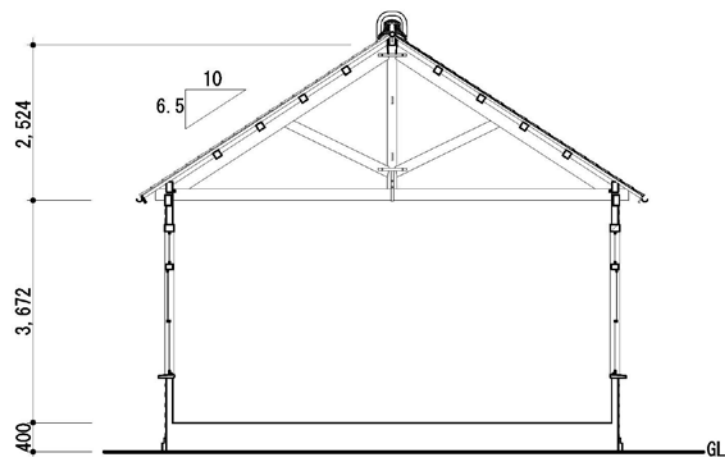
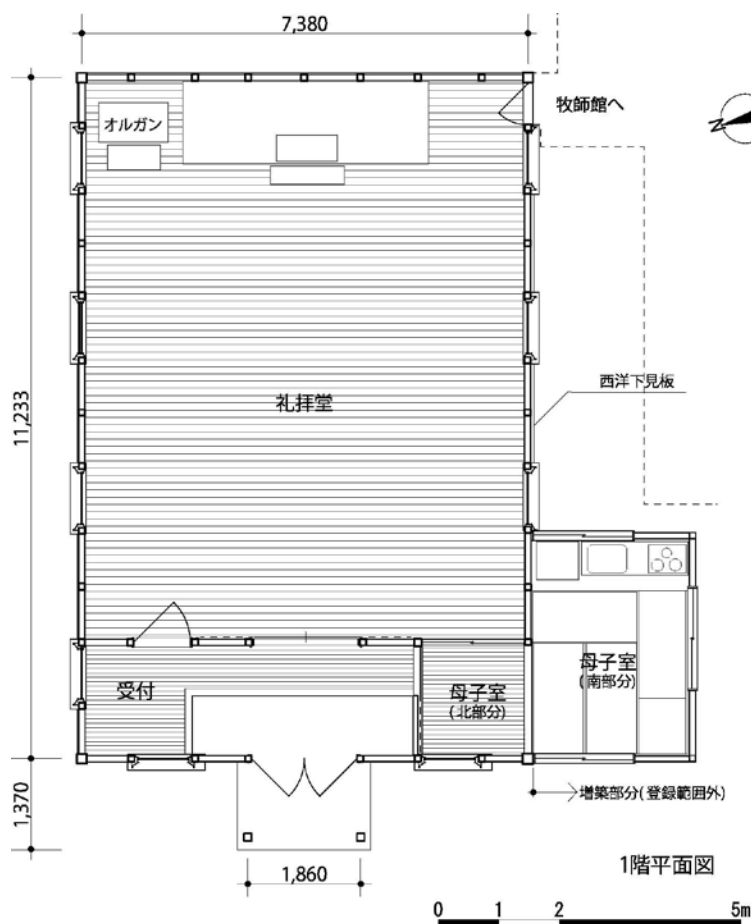
礼拝堂正面全景（西より）



礼拝堂の小屋組（北西より）



大正4年頃の礼拝堂
（加藤春夫監修 1990 年より）



瀬戸永泉教会礼拝堂
現状断面図及び立面図



旧メソジスト西尾教会 (西尾市鶴舞町)
現愛三工業所所有 (明治 30(1897) 年建造とされる)



カトリック主税町教会礼拝堂・尖塔 (名古屋市東区)
(明治 37(1904) 建造、昭和 5 年に大規模改造)

3 旧山繁商店（仲切町・深川町）

旧山繁商店は、瀬戸川流域の北側に位置する北新谷^{きたしんがい}と呼ばれる地区の一角に位置しています。丘陵地の斜面に多くの窯屋が集積し、製品の集積、運搬に有利な立地でした。広い敷地に①離れ、②事務所、③旧事務所、④土蔵、⑤「新小屋」、⑥～⑧倉庫群、⑨塀、そして今はない主屋などが配置されています。

万延元（1860）年生まれの初代加藤繁太郎は、

明治 12(1879) 年には養嗣子となった杵左衛門家近くの敷地に、主屋（現在滅失）を建てて移り住み、明治 19・20 年頃から陶磁器卸問屋「山繁陶磁器商店」を起業します。明治 22(1889) 年に母屋の南側に 2 階建ての①「離れ」を建造し、そこは内外の要人をはじめとする来訪・応接の舞台となりました。明治 36(1903) 年に主屋の北隣に④土蔵ができ、大正 3(1914) 年に



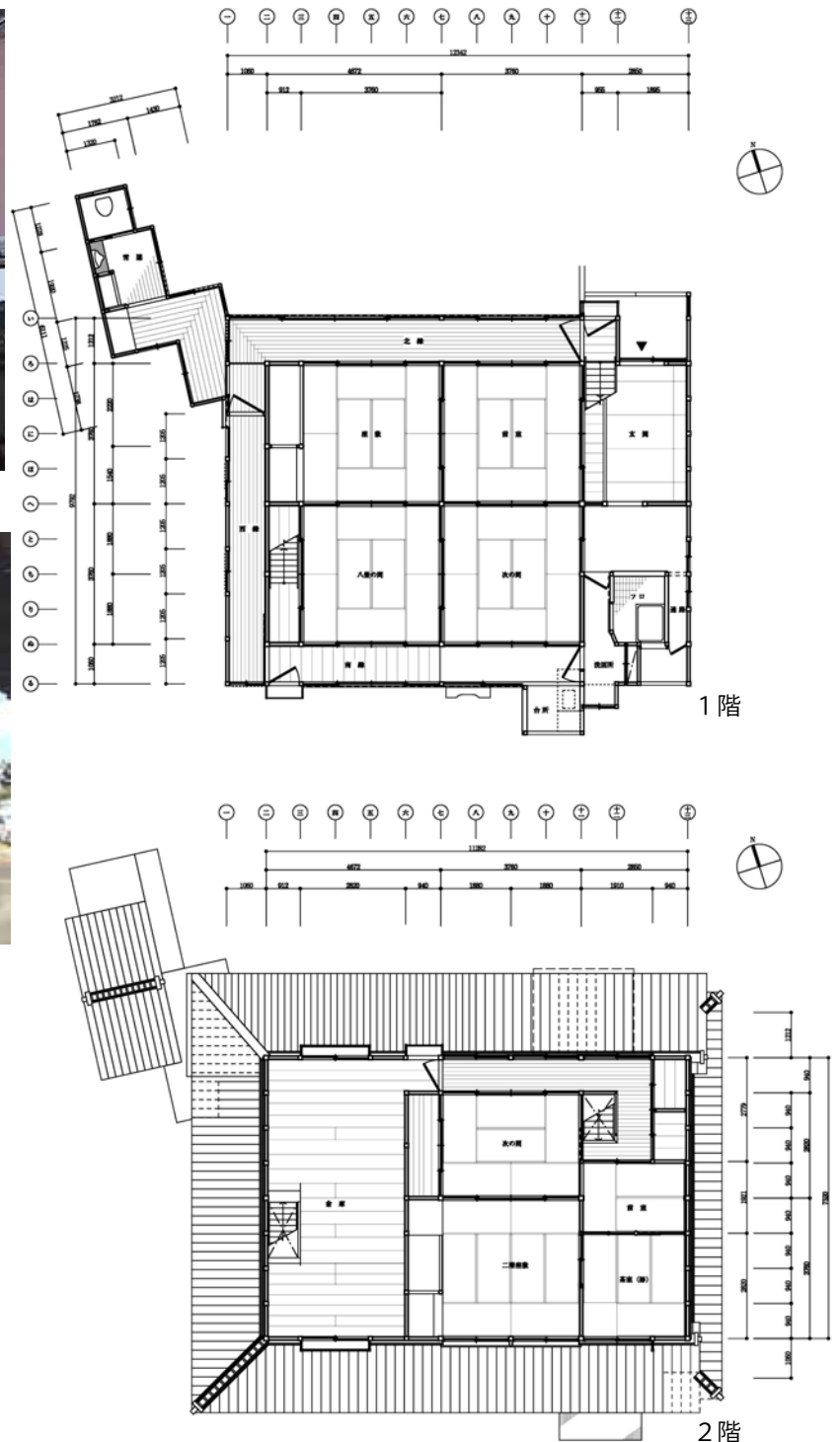
①離れ・⑨塀・③旧事務所（西から）



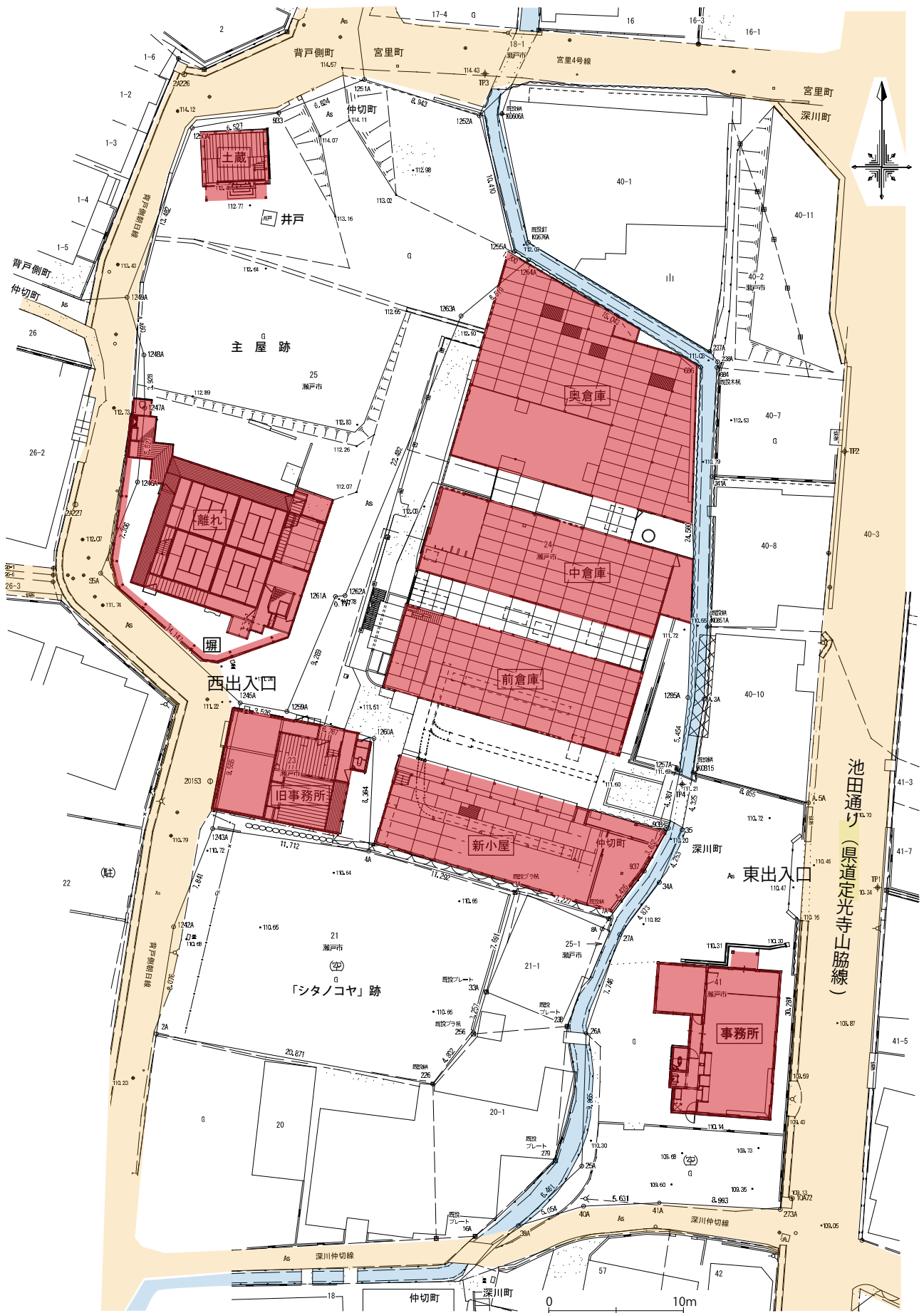
⑨塀・①離れ（南東から）



①離れ 2 階 茶室（跡）（南から）



旧山繁商店 ①離れ平面図（S=1/200）



登録文化財（建造物）

旧山繁商店保存建造物配置図（S=1/400）

は、西側の通り沿いに③旧事務所、その東側奥に⑤「新小屋」と呼ばれる土蔵造りの倉庫建物が建造され、大正8年には「山繁合名会社」に組織変更し、会社組織としての体制が整えられました。その後二代・三代と加藤繁太郎家は引き継がれ、昭和14(1939)年には中国上海市に支店を開設するなど海外貿易も活発化します。戦中には軍需用品生産が行われた時期もありましたが、終戦の翌年には陶磁器卸売業を再開し、南洋向け貿易陶磁器の加工完成業を行うなど、早期に戦前の隆盛を取り戻しています。昭和22(1947)年に新たな②事務所を東側の池田



⑤新小屋・③旧事務所（北西から）



①離れ・③旧事務所・⑤新小屋（南西から）



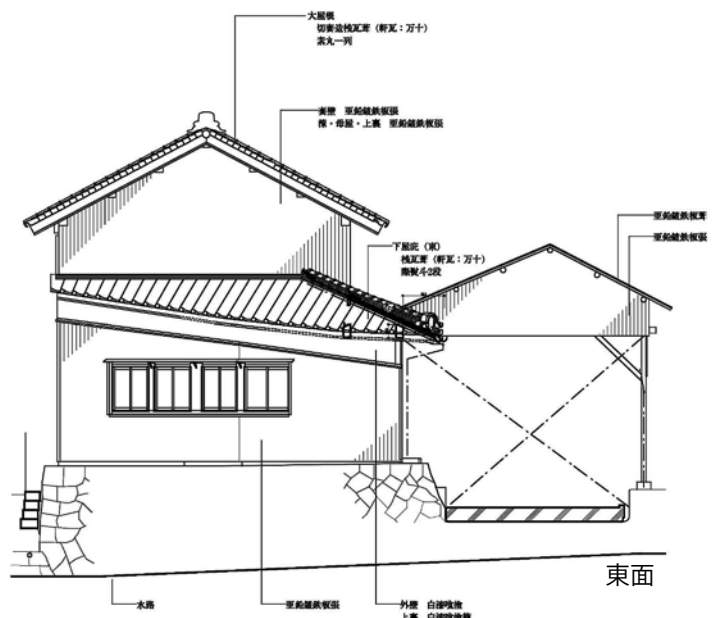
⑤新小屋（北西から）

通りに面して建造し搬入出の基点とし、戦中・戦後の物資が不足する中にも⑥～⑧倉庫群を築いていき、倉庫の一部を絵付場などに利用するなど、戦後の企業成長を成し遂げるに至りました。

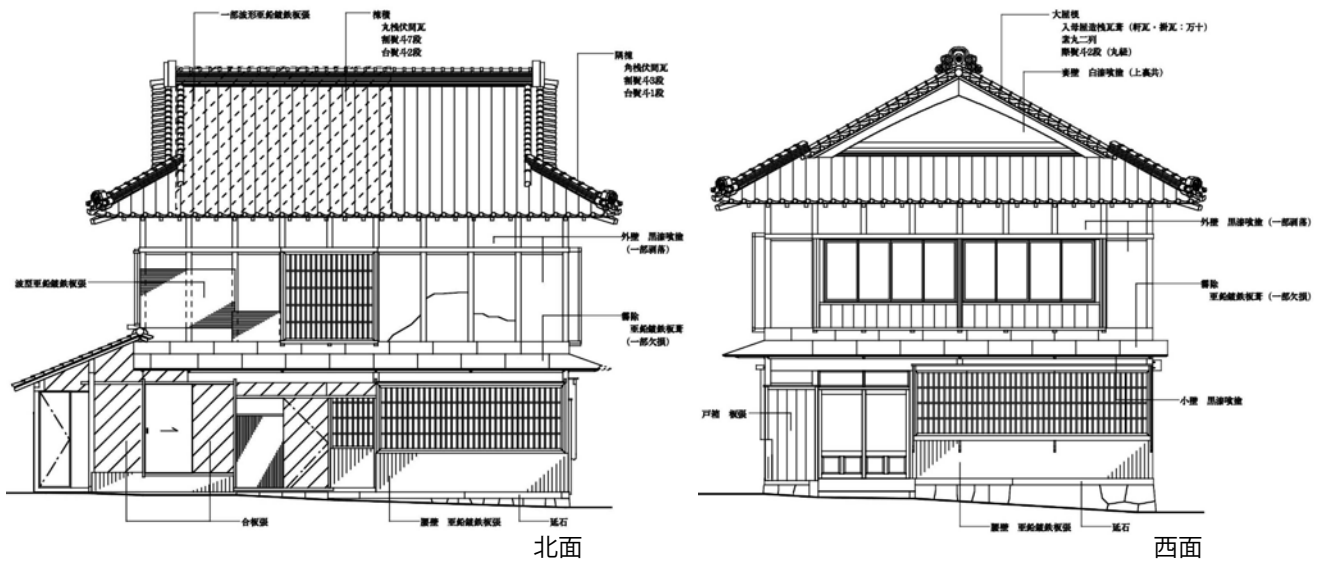
山繁商店は瀬戸市の旧中心市街地の中にあり、「せともの問屋」として、明治・大正・昭和の各時代を生きてきました。広大な敷地に各時代ごとの建物が纏まった形で残されているのは大変貴重です。平成29年度は旧山繁商店の保存活用計画を瀬戸市が策定し、保存修理・公開活用を進めてまいります。

【参考引用文献】

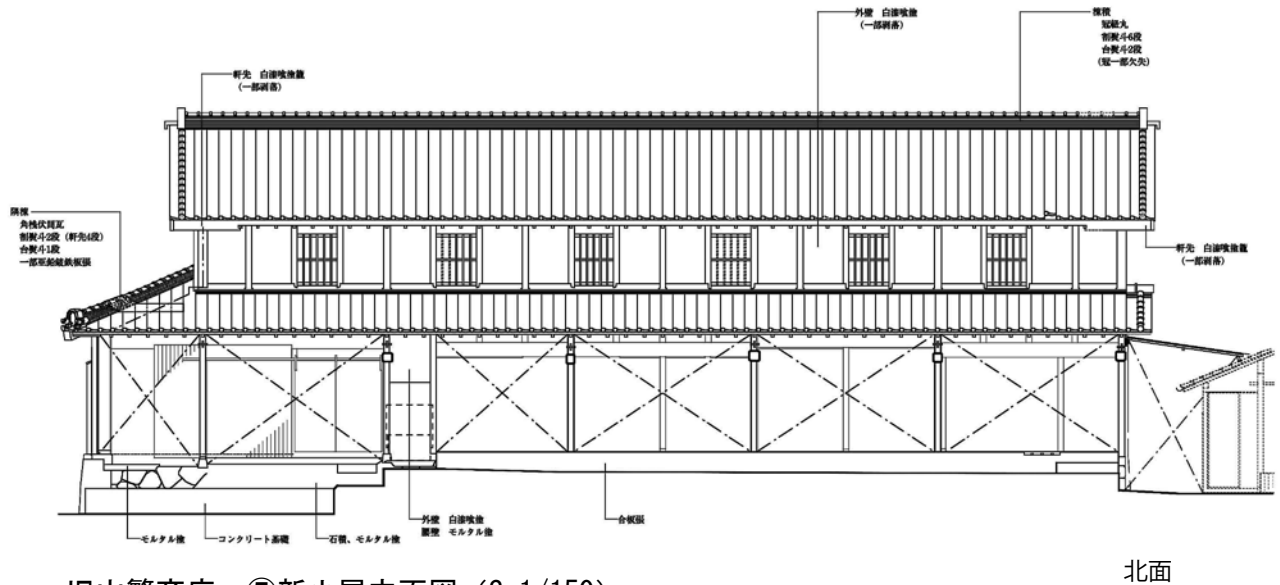
瀬戸蔵ミュージアム 2009『山繁三代のコレクション～明治以降の商家のうつわ～白雲堂周兵衛を中心に』



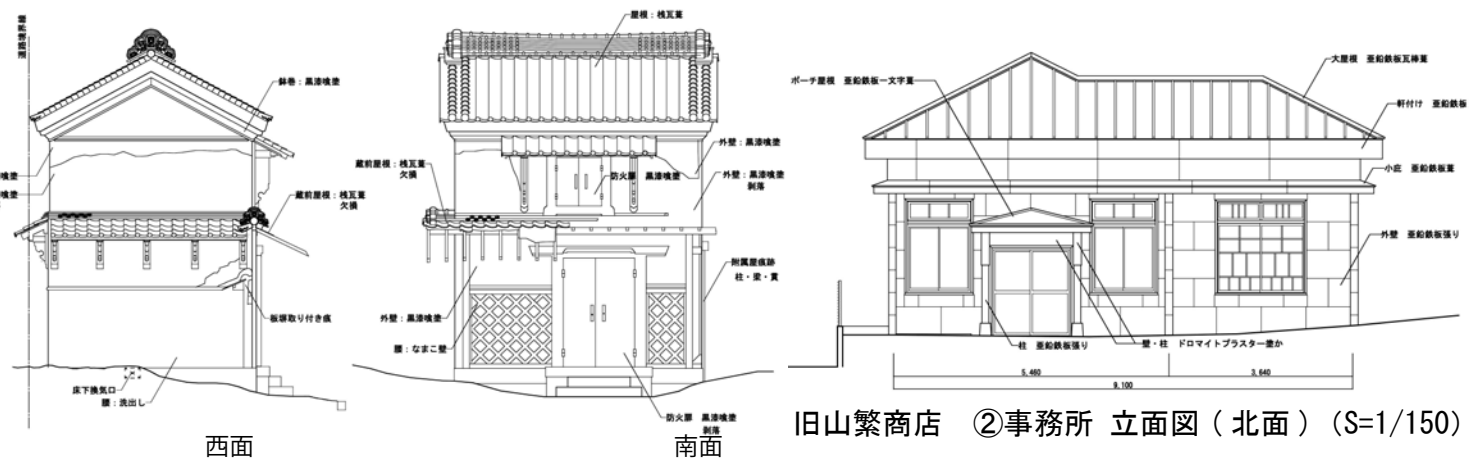
⑤新小屋2階（西から）



旧山繁商店 ③旧事務所立面図 (S=1/150)



旧山繁商店 ⑤新小屋立面図 (S=1/150)



旧山繁商店 ④土蔵 立面図 (S=1/150)



旧山繁商店 ②事務所 立面図 (北面) (S=1/150)

今後のスケジュール

<12月>

せと歴！ まちめぐり 下半田川地区

日 時：12月9日（土） 午前の部：午前10時～正午

午後の部：午後1時30分～午後3時30分

集合・解散場所：下半田川町民会館

内 容：オオサンショウウオ人工巣穴、八剣社・観音堂などを見学します。

参加費：無料

定 員：各部30人

※申し込み方法等、詳しくは広報せと12月1日号に掲載します。

瀬戸市歴史文化基本構想ホームページ

昨年度、策定した瀬戸市歴史文化基本構想や基本構想に関連した取り組みをホームページにて掲載しています。

これまでに開催した「まちめぐり」や「学び塾」の様子を紹介するとともに、「まちめぐり」の資料をダウンロードすることができます。

アドレス：<http://seto-cul.jp/rekibun/>

ぜひ、ご覧ください。



本事業は、平成29年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業（文化芸術進行費補助金）を活用して実施しています。